

開館五十八周年記念展

朝鮮通信使と 江戸時代の人々

(選)



天理大学附属天理図書館

通信使との交流

抗礼（対等の礼）をもって行われた両国の善隣友好のまじわりは、たんに将軍と朝鮮国王との交流にとどまらず、各藩の大名や儒者、更には民間にまで及んだ。交流は主に筆談唱和・詩文贈答という形で行われたが、それらは天和・正徳の頃より印刷本として盛んに刊行されるようになる。

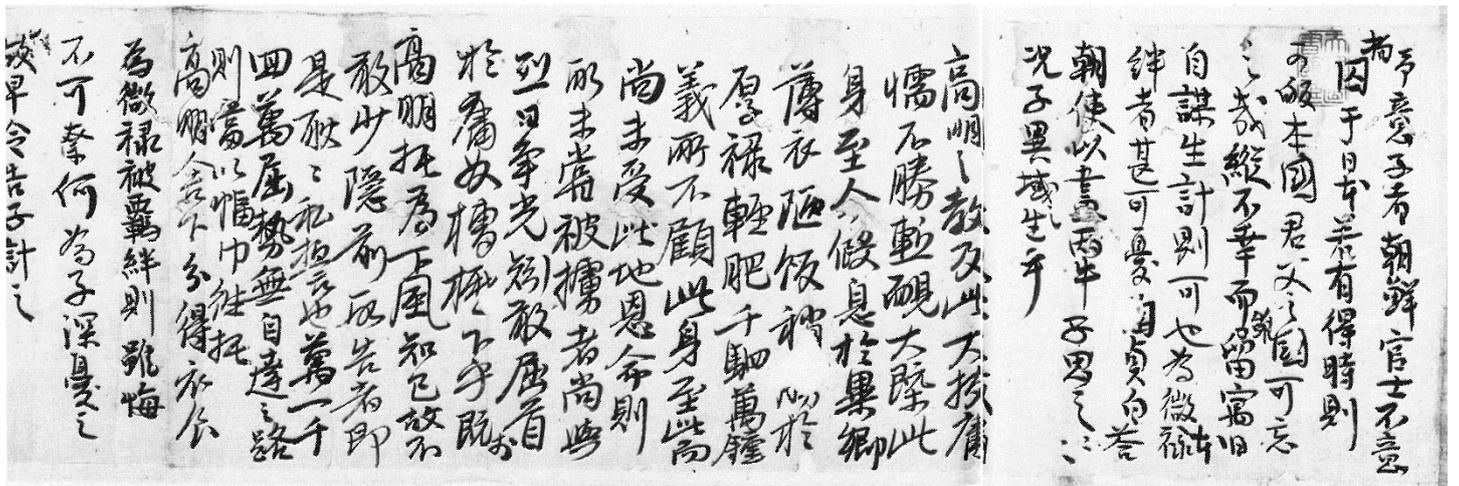
江戸時代の人々の通信使に対する期待はきわめて熱いものがあった。修好の国の使節というだけでなく、異国の入、そして異文化に直接触れる絶好の機会であったからである。通信使一行の客館到着、待ちかねたその地の儒者・文人たちは競って客館に馳せ参じ、詩文の唱和を求め、筆談によって朝鮮国の歴史文化・風俗習慣、あるいは中国学界の近況をたずね、また書画の揮毫を請うたのである。その熱狂的なありさまについて享保四年度の製述官申維翰は、一夜に費やした紙は数百枚、詩文・書画の揮毫のため鶏鳴の時に至っても寝ることができなかつたと語り、明和元年度の書記元重拳は、来日中の三・四ヵ月の間に一千余の人々と接触し、二千篇の唱和に応じたとのべている。

この異常ともいえる日本人の求詩・求墨は、通信使にとって相当の負担となったに違いない。しかし「交隣之道、貴在誠信」を旨とする彼らは、決してこばむことはなかつたのである。

館蔵通信使資料中、最も多いのが筆談唱和に関するものであるが、この度の展示では、先ず江戸時代における我が国と朝鮮人知識人との出会いを記す資料から眺めてみることにした。

1 藤原惺窩・姜沆筆談 写

江戸時代に朱子学を再興した藤原惺窩と慶長の役（1597）で虜囚となった姜沆が筆談した際の自筆原本である。両者が京都伏見に初めて会ったのは慶長三年（1598）の秋のことであった。以来、惺窩は姜沆に朝鮮朱子学を学び、『朱子訓蒙』を书写、あるいは『訓解四書五経』を出版するなど、少なからぬ影響を受けた。筆談では微禄を憂うる姜沆に、そのようなことに心をとられぬように忠告し、姜沆はそれを快く受け入れたことなどが記され、両者の情誼は互いに深い信頼の上になつていたことがわかる。慶長三年（1598）頃写。

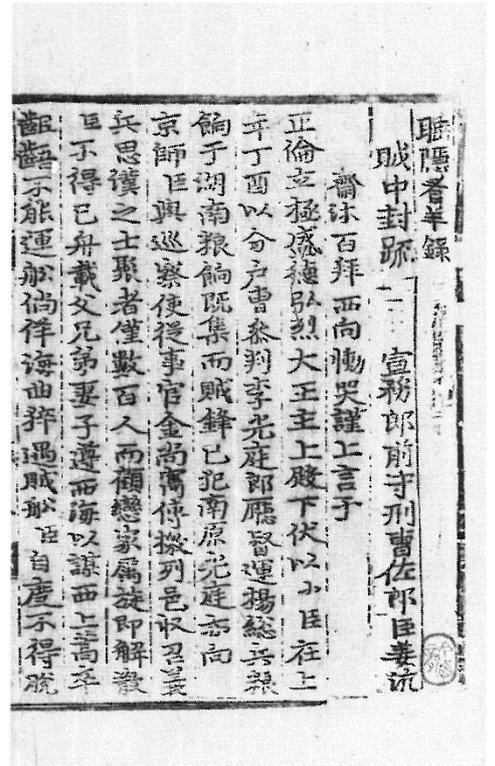
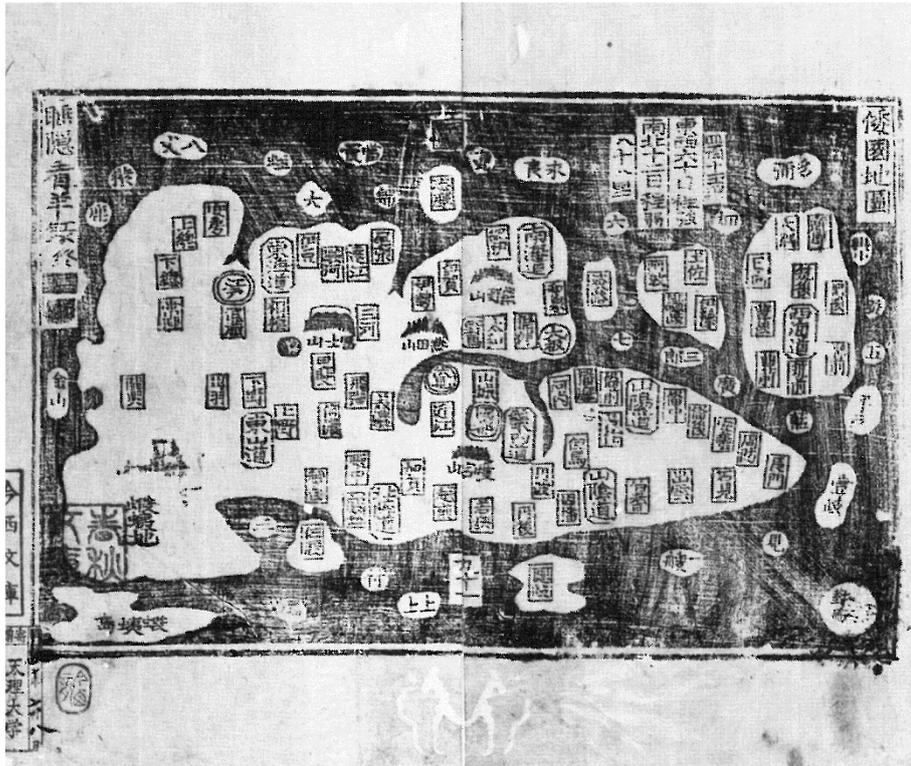


通信使の日本記録

通信使達は来日の度に日本に関する詳細な記録や紀行文を著わした。山川・風俗・官職・法制・衣服・飲食・器物・花卉・礼節に至るまで、その綿密な観察記録は当時の対日本認識の基本的資料でもあったのである。この度は、『月峯海上録』『看羊録』など江戸期以前のものも含め、関連資料七点を紹介することにした。

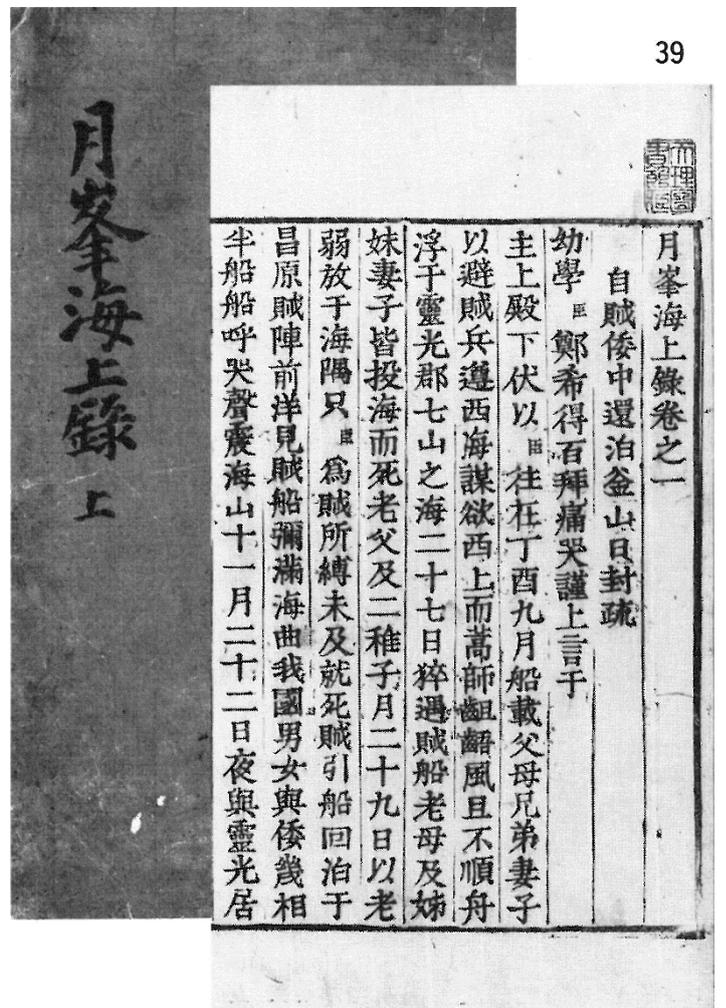
40 看羊録 刊

姜沆 (1567~1618) 著。姜沆は、慶長の役 (1597) で虜囚となり、慶長五年 (1600) に帰国するまでの三年間を、伊予国大洲、大坂、京都伏見で軟禁生活を送った。本書は、その間に見聞した日本の国情や歴史・地理・人物・風俗等についての詳細な記録で、帰国後、朝鮮国王に報告したものである。李朝時代刊。



39 月峯海上録 刊

鄭希得 (1573-?) 著。月峯は鄭希得の号である。慶長の役 (1597) で虜囚となり、阿波国徳島で抑留生活を送った。本書はその間の日記で、畿内道東海道以下西海道までの八道六十六州三百九十九郡二島について、日常の敬称に「様」「殿」を慣用すること、長短の剣を帯びることなど、見聞の事柄を整理収録している。六代の孫、鄭澗によって刊行された。

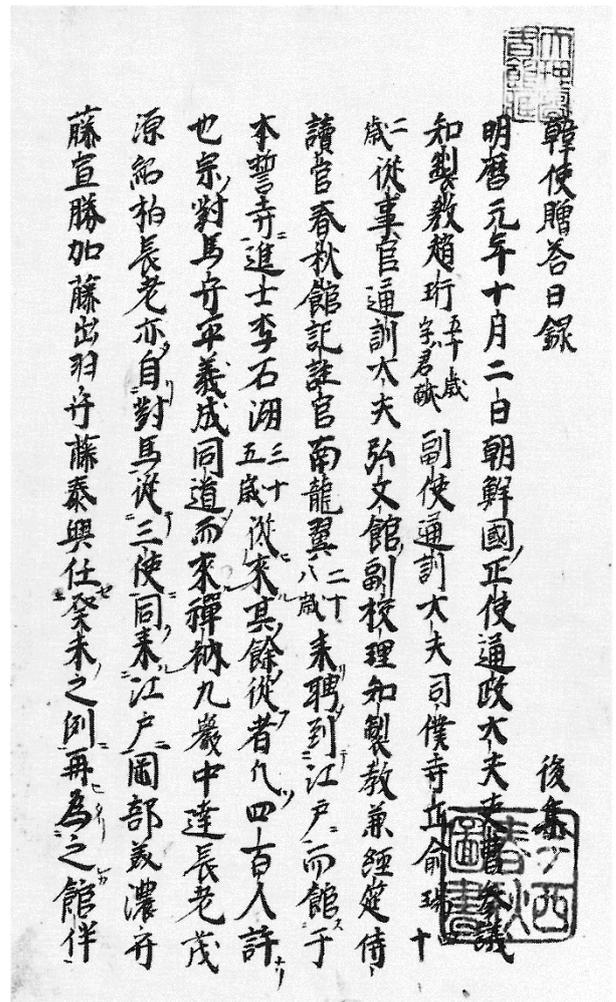
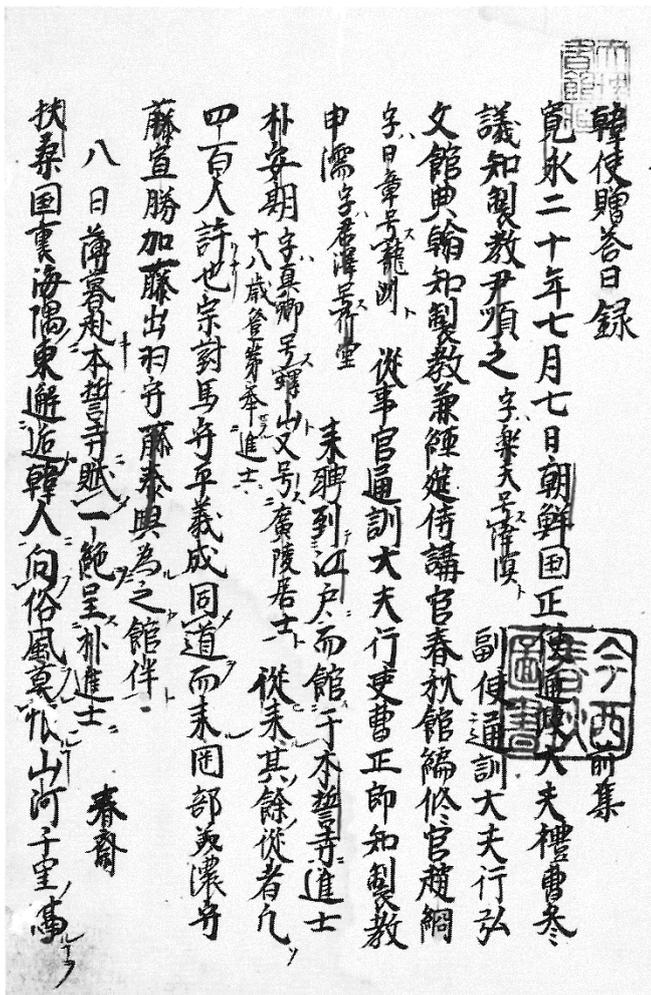


41 扶桑録 刊

南龍翼（1628～1692）著。本書は、『壺谷集』巻十一・十二に収録。南龍翼は孝宗六年（明暦元 1655）正使趙珩に随行来日した従事官である。本書のうち、「聞見別録」が日本観察の部分で、倭皇代序・関白次序・対馬島主世系・官制・州界・道里・山川・風俗十条・兵糧・人物などの項目を立てて詳細にのべる。特に風俗の項では、日本人の性質、髪型やおはぐろについてのべ、また諺文の如き五十字の国字があることなど記している。『海游録』と共に、出色の日本記録である。

2 韓使贈答日録 写

明暦二年（1656）写。前集は寛永二十年（1643）、家綱誕生祝賀に来日した従事官中濡（竹堂）・製述官朴安期（螺山）らと、林信勝（夕顔巷・羅山）・林春斎（鷲峯）・林春徳（考槃邁、のち函三子と号す）らとの漢詩文贈答集。後集は明暦元年（1655）、家綱襲職祝賀に来日した正使趙珩（翠屏）・副使俞場（秋潭）・従事官南竜翼（壺谷）らと林信勝・林春斎・林春徳・人見友竹らが贈答した詩文と筆談を収録したものである。これらの贈答は寛永・明暦ともに客館の本誓寺で行われた。



42 日本紀行 写

孝宗六年（明暦元 1655）、家綱の四代将軍襲職祝賀に来日した通信使の日々記。著者は明らかでない。内容は、孝宗六年四月二十日にソウルを出発、翌年二月十日帰国するまでの記録で、日本側の記録である「通航一覽」の記事とほぼ一致する。展示は、帰国の前に将軍家綱より国書を托され、同時に大太刀二十柄・鎧二十領・撒金六曲屏風二十雙などを贈られた旨が記されている。

4 韓使贈答略記 写

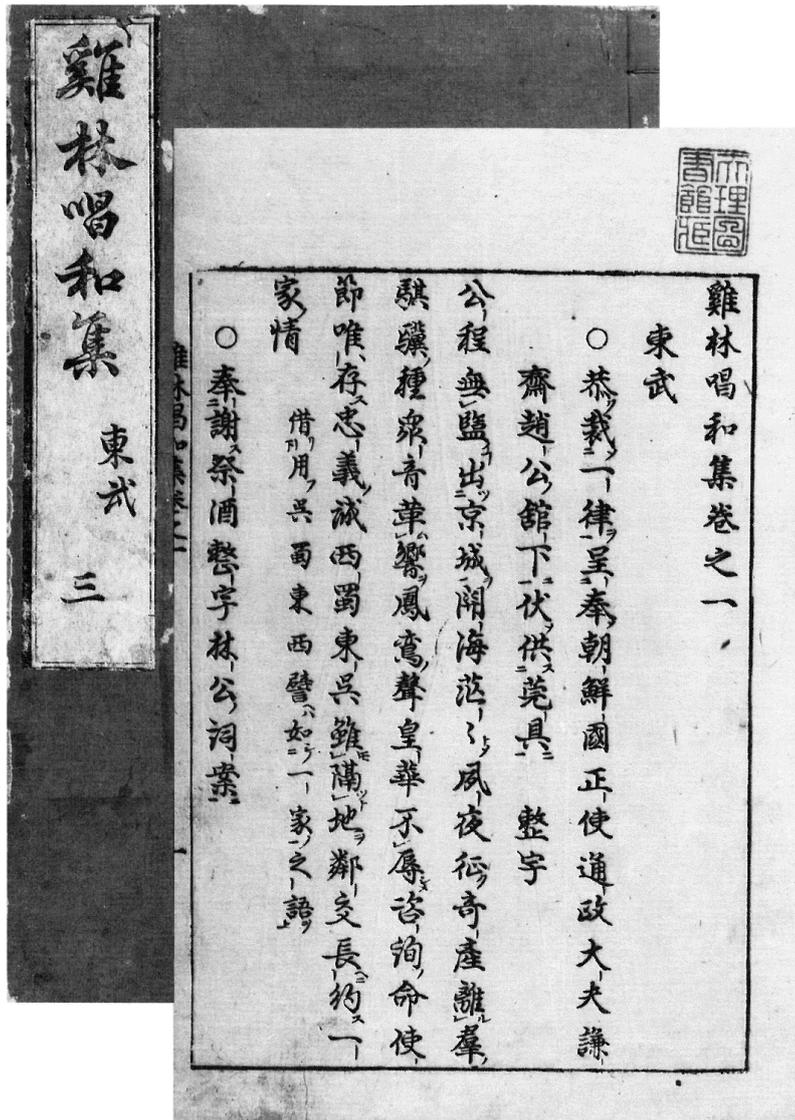
江戸時代末期写。天和二年（1682）度の正使尹趾完・副使李彦綱・従事官朴慶後と水戸藩第二代藩主徳川光圀との贈答文を集録した書。他に正徳元年（1711）八月二十八日長州赤間関での製述官李東郭や草場居敬らの唱和、享保四年（1719）の書記成夢良の「竹之絵賛」などを合記する。

3 和韓唱酬集 刊

天和三年（1683）刊。綱吉の五代将軍襲職祝賀のために来日した正使尹趾完（東山）・副使李彦綱（鷺湖）・製述官成琬（翠虚）らと東福寺長老祖辰、江戸の林鷄峯・林整宇ら林家一門、木下順庵、大坂の山本洞雲、京都の松下見林・青水東庵ら儒者・漢詩人との詩文唱和集。刊本としては初期のものである。

5 鷄林唱和集 刊

正編十五卷、続編十卷。正編は正徳二年（1712）五月刊、続編は同年十二月刊。正徳元年（1711）、六代将軍家宣の襲職祝賀に来日の通信使一行と百数十人にのぼるわが国の儒者・文人らとの贈答詩文を集録した書。正編は正使趙泰億（謙斎・平泉）・副使任守幹（靖菴）・製述官李磧（東郭）らと、対馬藩儒雨森芳洲、江戸では大学頭林鳳岡・岡島冠山、京都では稻生若水・伊藤梅宇、大坂では入江若水・岡西惟中、下関では山県周南など藩の儒官から僧侶・町人などあらゆる階層にわたっている。続編は正編とは構成が異なり、『七家唱和集』と題して木下順庵系統の室鳩巢・深見玄岱・祇園南海ら儒者七人と通信使との個別の贈答詩文集七種を収録する。



43-I 東槎日記 写

肅宗三十七年（正徳元 1711）、家宣の六代将軍襲職祝賀のため来日した副使任守幹の日記で、同年五月十五日ソウルを出発し、十月十八日に江戸に入り、翌年三月九日に帰国するまでを記す。

43-II 江関筆談 写

『東槎録』坤巻に収められている。正徳度の正使趙泰億が新井白石との筆談・唱和を自ら編集したもの。巻末に江戸から送られてきた白石の一文を収めるが、帰国する使節一行を見送ることもできず、送別の辞さえのべられぬつらさを切々と記している。なお、この文章と序文は朝鮮本にはあるが、日本の刊本では削除されている。

6 山県周南等与朝鮮信使唱酬筆語 写

山県家は、良斎・周南・菜園と三代にわたって萩藩の儒官をつとめた家柄で、正徳元年（1711）、享保四年（1719）、寛延元年（1748）と三度赤間関に逗留した通信使の接待役にあたった。掲出本は、その時々贈答した漢詩文で、主として通信使の筆蹟を卷子本に仕立てたもの。なお、周南は十九歳の時荻生祖株の門に入り、江戸遊学三年後帰藩、元文二年（1737）藩校明倫館の館長となった。信使との筆談応酬の際は、文才ひときわ優れ、信使の激賞するところとなったといわれる。

6-I 正徳元年（1711）来日の正使趙泰億（平泉）の筆蹟。周南の詩に唱和したもの。

6-II 享保四年（1719）来日の製述官申維翰（青泉）の筆蹟。周南の父良斎の詩に唱和したもの。

9 和韓唱和集 刊

享保六年（1721）刊。享保四年来日の製述官申維翰（青泉）らと、鳥山通徳門下の入江兼通（若水）・池田常貞（南溟）らが大阪の客館西本願寺で贈答した筆談・唱和集。展示は、「朝鮮諺文」、即ちハングル。池田南溟の求めに応じて書記張応斗（菊溪）が書き記した。

24 韓客筆語 写

享保四年（1719）、備後国鞆浦で行われた副使書記成夢良（長嘯軒）等韓使一行と、福山藩儒伊藤梅宇（仁斎の次男）との筆談問答及び唱和詩を一巻にまとめたもので自筆原本である。日東の儒宗伊藤仁斎が性理学を論辨した書一本を賜りたき旨の一条もみえる。図版は成夢良の筆蹟。



44 海游録 写

申維翰（1681～？）著。肅宗四十五年（享保四 1719）、正使洪致中の製述官として来日した。本書は日本観察記録の中でも白眉のもので、特に「附聞見雜録」は日本の国情全般に及んで余すところがない。国制・地勢・物産・服制・田宅・寺刹・文化・医学・風俗・日本人性などにつき、記述は詳細である。展示は巻第一の巻頭。対馬の太守より、八代將軍吉宗の襲職祝賀信使一行の派遣を依頼してきたことの記事がみえる。

12 韓館贈答 刊

寛延元年（1748）刊。この年末日の正使洪啓孟（澹窩）以下、林家一門との漢詩文贈答集。展示の書は全五巻の内、巻一・二。巻三以下は追而出来との予告があるが未刊に終わったようである、



29 朝鮮人来朝図 写

江戸の客館浅草本願寺に向う通信使の一行、駿河町越後屋呉服店のあたりであろうか。江戸の人達の待ちわびた大行列が清道旗と共に通過して行く様が描かれている。晴着を着た見物衆の中には、子供に乳房を含ませた母親もみえる。透視遠近法を取り入れた浮絵の技法で描かれた筆彩画。寛延元年（1748）、九代将軍家重の襲職祝賀に来日した通信使一行といわれる。羽川藤永筆の原画からの模写と考えられる。

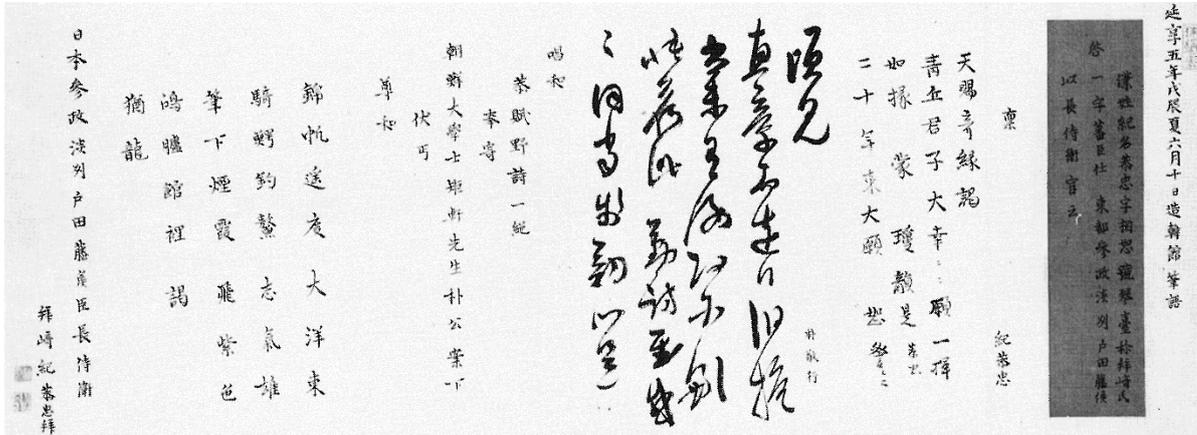
38 朝鮮通信使行列絵巻 写

縦29糎、全長17米45糎の大型絵巻物である。長い行列に登場する人物は、正使を中心に、日本の武士や副使・従事官・堂上訳官・上通事・製述官・写字官、楽隊や旗手などおよそ六百名に及ぶ。筆者・書写年代共に明らかでないが、「良医」が一行に加わったのは天和二年（1682）からであるところから、この絵巻は江戸中期以後の通信使の記録図といえよう。



10 韓館唱和 写

延享五年（1748）六月十日、若年寄戸田淡路守氏房の儒官拜崎恭忠（琴台）が、江戸の客館において製述官朴敬行（矩軒）・書記李鳳煥（濟菴）・書記李命啓（海阜）らと筆談した際の自筆原本である。卷子本仕立て、全長九米五十糎。



13 両好余話 刊

明和元年（1764）刊。宝暦十四年（1764）来日の製述官南玉（秋月）・書記成大中（龍淵）らと、奥田元継（仙楼）及び門人達との問答を集録した書。奥田元継らの問に、南玉らが答える形式で、内容は全百五十六項目。名刺・学風・高麗紙から食品・禁酒・米価など日常生活にまで及ぶ。彼国に関する知識を如何に求めていたかを伺う好資料であろう。

14 宝暦十四年朝鮮使記 写

宝暦十四年（1764）に来日した通信使に関する記録を集めたもの。正使趙暎（濟谷）をはじめ一行の官職及び姓名・献上品・料理献立などについて記す。展示は「朝鮮通信使一行座目」で、注目すべきは片仮名でハングル読みを付していることである。本書の付録には、延享五年（1748）来日の信使一行の行列順序を記したものがあり、清道旗・喇叭・正使の乗屋轎など筆彩図多数を挿入する。

33 大船用文（朝鮮人来聘行列） 刊

宝暦十三年（1763）刊。北尾雪坑斎画。本書は大船図・通信使行列図・朝鮮ことば・楽器・武器・乗物の図・名所・土産名物などを図人で説明したもの。展示は、「朝鮮国信使解纜図」。釜山浦より対馬にむけていよいよ出港する図である。

16 鷄林情盟 刊

文化九年（1812）刊。三宅橘園著、川越有邦等編。文化八年度の製述官李顛相（太華）・書記金善臣（清山）・同李明五（泊翁）・李文哲（菊隠）と皆川洪園門下の三宅邦（橘園、威如斎ともいう）との筆談・唱酬を収む。附録に「朝鮮使人名氏」があり、正使金履喬以下通信使一行の姓名を記す。

鷄林新珠 刊

鈴木文錦撰。享保度の信使一行が、江戸の人・鈴木文錦女の詩書を賛美せる詩文の真跡を模刻したもの。鄭恵卿・成夢良の書を収める。